

## 2. 長沖古墳群の性格と特徴

長沖古墳群は、埼玉県北端部の児玉郡児玉町長沖に所在する総数約180基を超す大規模群集墳である。小山川（旧身馴川）の北岸に広がる河岸段丘の低位面とそれに接する台地上に広く展開しており、南北500m、東西1500mの広範囲に分布している。

ここでは今回の調査で検出された2基の古墳跡の古墳群内における編年的位置づけを目的に、過去の調査成果から古墳群の形成過程を概観し、当古墳群の性格と特徴について若干の検討を試みたい。

### (1) 過去の調査と長沖古墳群の概要

長沖古墳群に関する最も古い記録は、明治28年4月11日に秩父地方の探訪に出た阿部正功・大野延太郎・鳥居龍蔵による児玉町梅原所在古墳群の探査報告が紹介されており、往時の古墳群の様子を知ることができ（阿部他1895、塩野1999）。

昭和26年に刊行された『埼玉県史』によると児玉町金屋地区には152基の古墳の所在が確認されており、長沖・高柳地区には5基の前方後円墳を含む136基の古墳が存在していた（埼玉県1951）。その後、盗掘や耕作等による破壊を受け、消滅してしまった古墳も相当数にのぼっている。

本格的な考古学的調査としては、昭和48年に実施された本庄高等学校考古学部による十兵衛塚古墳（長沖79号墳）の測量調査が挙げられる（本庄高等学校考古学部1975）。調査の結果、全長37mを測る前方後円墳で、埴輪を有することが判明した。主体部はすでに盗掘を受け、片袖型と推定される横穴式石室を有していたと伝えられ、築造時期は6世紀後半でも古い段階と考えられている。

続いて、昭和51年度から昭和54年度にかけて児玉南土地区画整理事業に伴って、2度の分布調査と5次にわたる調査が実施された。それにより157基の古墳の所在が明らかにされ、そのうちの22基の古墳が調査された（菅谷他1980）。同じく、環状1号線建設に伴って

昭和51年と昭和58年の2次にわたり7基の古墳が調査されている（恋河内1984）。

その後も小規模開発に伴う調査が相次ぎ、児玉町教育委員会により、さらに20基を越す新規発見の古墳跡などが調査され、大きな成果が挙げられている。

平成2年には埼玉県教育委員会が実施した古墳詳細分布調査の一環として長沖157号墳が学術調査され、黒斑を有するB種横ハケを施した円筒埴輪片が出土し、古墳群の形成初期の具体的な内容が明らかにされている（県立さきたま資料館1994）。

このほかに長沖古墳群から出土したと伝えられる鉄製楕円鏡板付轡（関・宮代1988）など、数多くの古墳出土遺物が知られている。

### (2) 今回の調査の概要

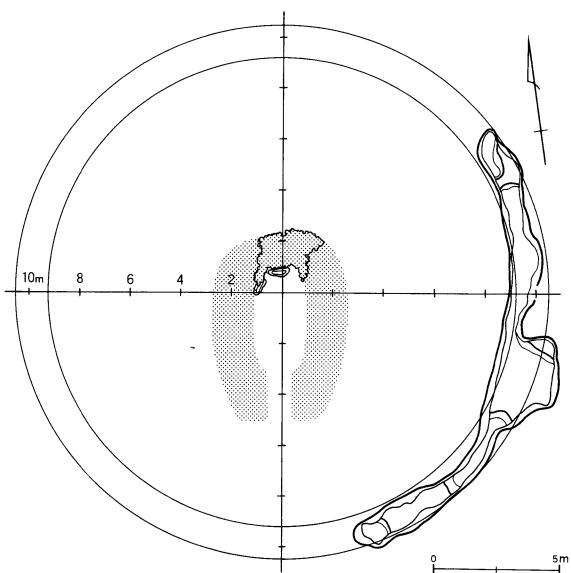
平成7年度に実施された県道秩父児玉線の建設に伴う発掘調査によって、古墳跡が遺跡南側の河岸段丘の低位面にあたるA区と台地上の平坦面に所在するC区からそれぞれ検出されている（註1）。

#### 道上1号墳

道上1号墳は、河岸段丘の低位面に所在するA区の北側に位置し、開墾等により墳丘の大半が破壊され、周溝と横穴式石室の一部が検出されただけであった。墳丘の北側には自然地形の埋没谷が湾入し、墳丘構築に傾斜地を利用する特徴が認められた。周溝は東半分のみ巡らし、石室の開口方向にあたる南側では途切れ、周溝の内径から墳丘径約19.2mの円墳に復元することができる。

横穴式石室を主体部としているが、馬蹄形に石列を巡らした石室控積みの基底部がわずかに遺存していただけで、石室の規模・平面形などの細部の状況は不明である。しかし、神川町青柳古墳群における調査で指摘されているように、古墳の築造にあたっては、設計上の長さの単位があり、これに基づいて石室や葺石などの位置が設定されていたことが容易に想定すること

第57図 道上1号墳墳丘復元図



ができる（田村・金子1997）。そこで、同様の操作により本古墳における「墳丘の設計」を復元すると、石室奥壁より内側約1mの位置に円の中心をおいて墳丘径を決定していたことが読み取れる（第57図）。ただし、石室各部の規模が不明であるため、基準長の算出や各部の比例関係などについては明確でない。また、石室の平面形態に関しては控積の残存状況から胴張りプランであった可能性が強いが、断定はできない。

周溝から土師器壺、須恵器甕、円筒埴輪、形象埴輪などの破片が少量出土している。このうち円筒埴輪は全体の器形の分かるものはないが、胎土に結晶片岩・雲母・白色針状物質・赤色粒子等の特徴的な混和材を含む一群が確認された。同様の胎土特性を示す円筒埴輪が、区画整理事業に伴う既調査古墳からも出土しており、群馬県藤岡市本郷埴輪窯から供給された可能性が指摘されている（井口1997）。

形象埴輪には、人物・鞍・盾・家などの破片が認められた。このうち鞍形埴輪の背板には弧線などの線刻文が認められ、寄居町箱石1号墳の鞍形埴輪に類似しており（西井他1999）、製作技法や胎土の特徴から円筒埴輪と同様に本郷埴輪窯群との関連が想定される。

道上1号墳の築造時期については、出土した円筒埴輪の形態的特徴や形象埴輪の様相から6世紀後半でも新しい段階に比定される。また、神流川を挟んで対岸

にあたる群馬県藤岡市周辺と児玉地域は、模様積石室の共通の分布圏を形成するだけでなく、本郷埴輪窯の供給圏に含まれ、6世紀における樹立埴輪の一定の割合を占めていたことが埴輪の需給関係の分析から判明しており、両地域間の密接な交流が想定される。

#### 村後3号墳

村後3号墳は、台地上に所在するC区南側に位置し、周溝の一部が検出された。主体部は調査区外に位置しているため詳細は不明である。周溝は全周せず掘り込みが浅く、やや不整形を呈する。

遺物がまったく出土していないため、築造年代を特定することは困難であるが、埴輪をもたないことや周溝の形態が明確でないことから7世紀代に下がる可能性が大きい。

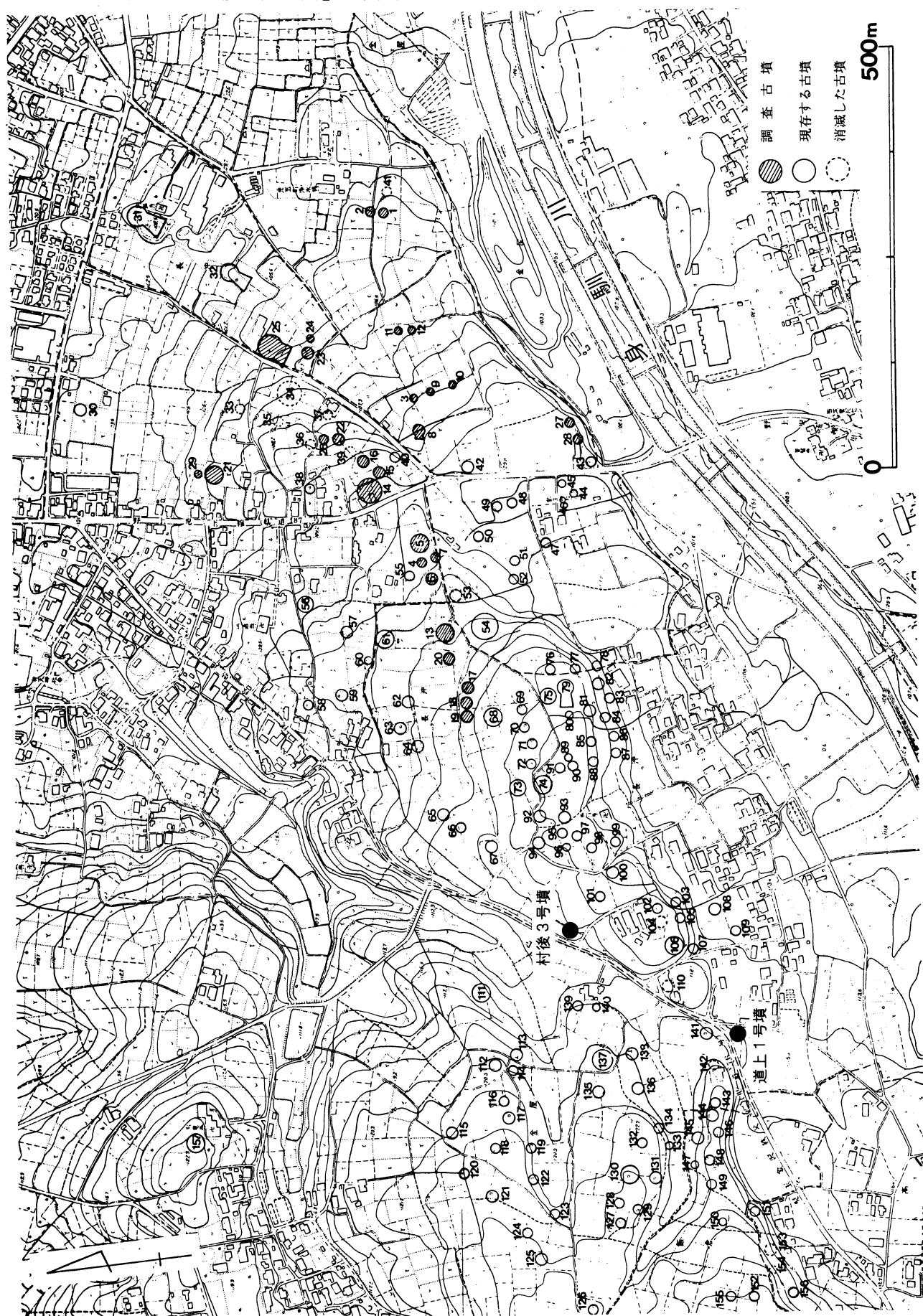
#### （3）長沖古墳群の分布と群構造

長沖古墳群の分布は、南の丘陵地帯より続く洪積台地上に所在するものと、台地の南を東流している小山川によって形成された河岸段丘上に所在するものに大きく区分することができる（第58図）。また、地形的には現在県道秩父児玉線が通っている古墳群の所在する台地を北から分断するように大きく湾入する谷を境にして、便宜的に西側を「高柳支群」、東側を「長沖支群」と呼称し、両者を総称する場合には「長沖・高柳古墳群」とすることが提唱された（菅谷他1980）、平成6年刊行の『埼玉県古墳詳細分布調査報告書』では「長沖古墳群」に統一されており、本稿でもそれに準拠して、各古墳の内容について記述する。

既に、群構成については山崎 武（菅谷他1980）・杉崎茂樹（杉崎1989）・利根川章彦（1994）の各氏によって、微地形や古墳の分布のあり方から支群の構成について検討が行なわれている。

それらの成果によれば、西側の高柳支群は昭和59年に実施された梅原遺跡の調査において、長沖137号墳が前方後円墳であることが確認されている以外は、いずれも円墳によって構成されている（註2）。西から三つに分かれて延びる尾根上に15～17基が分布し、3～

第58図 長沖古墳群分布図(『長沖古墳群』より転載、一部筆者加筆)



4支群に大きく区分される。各小支群は、前方後円墳の長沖137号墳や長沖111・130・135号墳などの径15~35mの中規模の円墳を核に群形成がなされている。調査古墳が少ないため、築造時期の判明するものはほとんどないが、横穴式石室の石材を露出するものや埴輪の採集されるものがあることから、6世紀後半には築造を開始し、埴輪消滅期以後の7世紀代まで小規模な円墳が累々と築造された状況が窺われる。

なお、北方の長沖157号墳は径32mの大型円墳で単独で存在しており、後述するように古墳群形成の端緒となった有力墳として位置づけるのが妥当であろう。

東側に展開する長沖支群のうち台地上に立地する古墳の分布は、前方後円墳である長沖79号墳（十兵衛塚古墳）を中心とする一群が小山川に面する台地肩部にやや集中したあり方を示しているが、おおむね台地上に広く分布している。これに対して、河岸段丘上に所在する古墳は、飯玉神社の周辺から東側に次第に多く分布しており、道上1号墳の所在する西側の地区は、現在長沖の集落があり、それによって消滅してしまったのか、古墳の分布がやや希薄となっている。

区画整理に伴い発掘調査が実施された長沖支群の東側から中央部にかけては中型前方後円墳・帆立貝式古墳・大型円墳が多数分布しており、群全体の中でも傑出した規模の古墳が集中したあり方を示している。

長沖支群では6基の前方後円墳の所在が現状で確認されている。台地北東部に長沖31・32・25号墳の3基の前方後円墳が同一の主軸方向で直線的に並び、その南側の河岸段丘面上には帆立貝式前方後円墳の長沖8号墳が所在する。また、小山川に面した台地縁辺部には長沖79号墳とすでに消滅してしまった長沖110号墳が所在している。いずれも全長30~50mの中型の前方後円墳である。

群形成の広がりは、大きく東から西に進んでいく傾向が窺われる。ただし、東側の地区の古墳も古い時期の古墳（大型円墳や前方後円墳）を核として群形成の終末期まで、支群を構成するような形態をとりながら築造が継続されていることも小型化した模様積石室の

分布状況から想定することができる。

主体部の変遷過程については、礫槻状の小竪穴式石室→袖無型短冊形横穴式石室→「毛野型胴張り石室」という埋葬施設採用の変革があり、しかも、児玉地域の群集墳における埋葬施設の状況全体から見るかぎり、時代の先取りをしている感があると、その特殊性が指摘されている（利根川1994）。

#### （4）長沖古墳群の形成過程

次に、調査古墳を基に主体部の変遷過程や埴輪・土器・副葬品の様相を中心に古墳群の形成過程について概観する。

【I期】 調査された古墳のうち最古のものは、有黒斑のB種横ハケ調整の円筒埴輪を有する長沖157号墳である。直径32mの大型円墳で、円筒埴輪は外面にB種横ハケを施し、川西編年III期に比定されている。凸帯は突出度の高い台形、透孔は半円形が確認されている。外面は第1段が縦ハケ、第2段以上は二次調整のB種横ハケ、口縁部は斜めハケを施す。内面は縦・斜位のナデを施す。焼成は良好で黒斑があり、外面に赤彩が認められる。築造年代は出土した円筒埴輪の特徴から5世紀中葉に位置づけられている。

埼玉県における野焼き焼成によるB種横ハケ調整の円筒埴輪は、美里町志渡川古墳から短甲・家等の形象埴輪とともに出土しているほか、本庄市公卿塚古墳から格子タタキ技法の円筒埴輪とともにB種横ハケをもつ破片がわずかに検出されている（太田1998）。

この他に野焼き焼成の一次調整縦ハケの円筒埴輪を出土した長沖34号墳と長沖15号墳周溝内側出土埴輪が当該期に該当する。長沖34号墳は直径30~40m級の円墳で、凸帯の上稜部が張出した凸帯をもつ埴輪が出土している。また、長沖15号墳周溝内側出土例は外面に赤彩を施し、凸帯の形態は長沖34号墳に類似し突出度が高く古相を示す。凸帯間には円形の透孔を一対穿孔しているが、最上段にも3個の円孔を穿つ。

【II期】 川西編年IV期併行の窖窯焼成のB種横ハケを施す円筒埴輪を出土した直径34mの大型円墳の長沖

14号墳が当該期に位置づけられる。第1段は一次調整縦ハケのみであるが、凸帯間と口縁部には二次調整B種横ハケが施されている。黒斑がなく、須恵質のものも含まれている。和泉式新段階の土師器壇・高坏・小型壺等を出土しており、5世紀後葉を中心とする年代が与えられる。

北武藏における無黒斑のB種横ハケ埴輪を出土する古墳は、児玉・比企・北足立・北埼玉地域の各地で確認されているが、特に児玉地域に集中している。本庄市旭・小島古墳群、美里町生野山古墳群、塚本山古墳群などの中小古墳から出土し、窯窯焼成技術の導入に伴い量産体制が実現されたことを予測させる。

ほぼ同時期の生野山9号墳と長沖14号墳を比較した場合、墳丘規模では径42mと径34mと懸隔が大きく、生野山9号墳には人物・馬・短甲・盾等の形象埴輪が伴っているが、長沖14号墳には部分的な調査ではあるが形象埴輪が出土しておらず、墳丘規模の格差が埴輪祭式にも反映されていることが窺える。

**【III期】** 長沖1・12・22・27号墳の4基に簡素化した小豎穴式石室が主体部として採用されている。円礫を用いた礫柳形態と（長沖1・22号墳）、緑泥片岩の板石を壁材に用いた箱式石棺形態（長沖27号墳）の2形態が認められ、長沖12号墳のように中間形態のものも存在する。いずれも墳丘中心部に構築されている。

円筒埴輪は2条凸帯3段構成のものが主体となり、外面調整は一次調整縦ハケのみで、透孔も半円形が一部残存しているが円形に統一され、板押圧による底部調整技法が長沖1・22号墳で確認される。このうち長沖15・22・2号墳は、口径と底径の差が少なく、各段幅の比率が均等に近く古相を示し、長沖1号墳は最下段幅がやや広くなり新しい様相が窺える。

群馬県・埼玉県北部における円筒埴輪への底部調整技法の出現時期については、最下段幅がまだそれほど広くない段階の富岡市富岡5号墳の円筒埴輪に伴出した須恵器蓋坏がTK10型式に近いことから、6世紀中葉の年代幅の中におさえられている（車崎1992）、長沖1・22号墳の様相からすれば、それよりもやや遅

るMT15型式段階の6世紀前葉には採用されていたと考えられ、今後類例との比較検討が必要である。

長沖2号墳からは須恵器無蓋高坏、土師器坏が出土している。無蓋高坏は四方透かしをもつ古い特徴をとどめる在地産の製品である。TK47型式併行に比定され、5世紀末葉ないし6世紀初頭に位置づけられる。

長沖12号墳は、周溝から土師器坏・高坏・甕が出土している。高坏は口縁部の大きく外反する模倣坏形態の坏部をもち、鬼高I式の新段階に比定され、6世紀前葉に下るものと思われる。

**【IV期】** 当該期に小豎穴式石室に替わって、袖無型の短冊形横穴式石室が導入される。長沖4・13・28号墳の3基で確認されている。石室の平面形態は、長沖4・28号墳は奥壁幅と羨門幅の差があまりない短冊形であるのに対して、長沖13号墳は奥壁幅と羨門幅の大きい笏形に変化し、石室規模も大きくなり後出的な要素が窺われる（増田1995）。

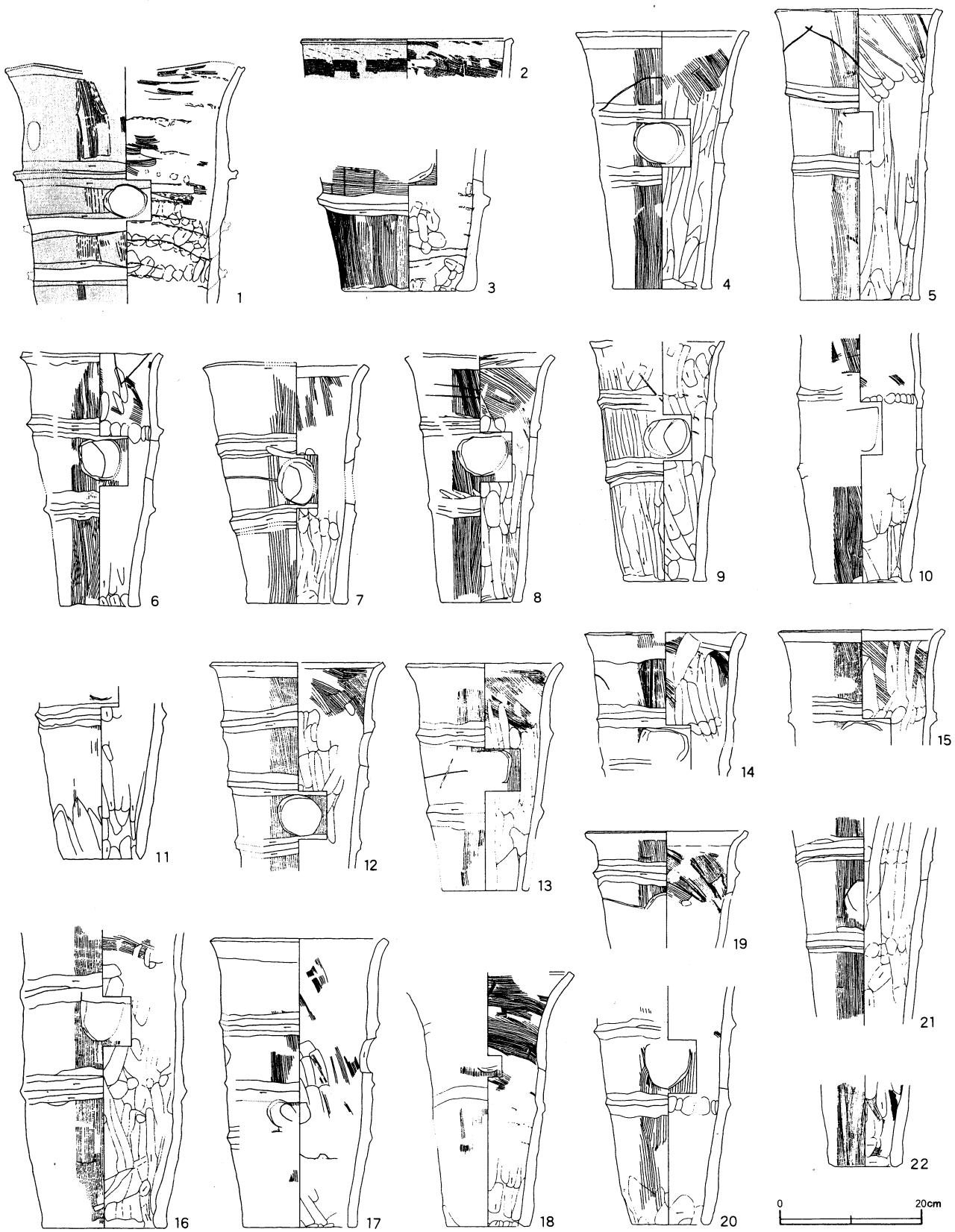
長沖25号墳は全長約40mの前方後円墳で、主体部については不明であるが、前方部が大きく開いた特徴的な墳丘形態である。出土した土師器の模倣坏から6世紀前半の築造と推定される。円筒埴輪の中には半円形透孔など古い様相が窺われるが、次期に盛行する板押圧による底部調整と内面に刀子削りを加えるものが存在し、円筒埴輪の変遷過程をたどることができる。

**【V期】** 当該期には横穴式石室の形態が多様化し、両袖型長方形プラン石室の長沖23号墳、河原石乱石積の両袖型胴張り石室の長沖8号墳が築造され、やや後出して「毛野型胴張り石室」と呼ばれる両袖型徳利形の模様積胴張り石室の長沖21号墳が出現する。

全長26.3mの帆立貝式前方後円墳の長沖8号墳は、頸部に補強帶を巡らす須恵器甕や、口縁部が短縮化し、外面板押圧・内面刀子削りの底部調整を施す円筒埴輪が出土しており、6世紀後葉の年代が与えられる。

長沖21号墳は、埴輪をもつ直径26mの大型円墳で、石室長8.16mを測り、模様積石室としては神川町南塚原8号墳に次いで本県第2位の規模を誇る。増田逸朗氏の模様積石室の分類では、平面形態が短冊形で、奥

第59図 長沖古墳群出土円筒埴輪



I期（1：15号墳内側出土）II期（2・3：14号墳）III期（4・5：15号墳，6～9：22号墳，10・11：1号墳）

IV期（12：28号墳，13～17：25号墳）V期（18～20：8号墳，21・22：21号墳）

壁幅と玄門幅がほぼ同率を示すA-1類に分類され、模様積石室の出現期にあたるⅠ期の6世紀第4四半期に比定されている（増田1996）。また、長沖21号墳からは最下段の伸長化した細身の円筒埴輪が出土しており、埴輪消滅期の様相を呈している。

なお、道上1号墳も出土した円筒埴輪や形象埴輪の様相から当該期に位置づけられる。

【VI期】 石室規模の小型化した毛野型胴張り石室をもつ長沖3・9・10号墳の3基が当該期に位置づけられる。未報告のため詳細は不明であるが、長沖66号墳も当該期にふくまれる（恋河内1984）。周溝は全周せず不明瞭なものが多く、埴輪消滅期以後の7世紀前半を中心とする年代が想定される。

長沖3・9・10号墳の占地状況をみると、途中に他の古墳を挟まず群をなし、直線的に並んで構築されている。前代の長沖21号墳のような初期模様積石室をもつ大型墳が独立墳的な立地を示しているのとは対照的なあり方を示している。これは当該期の造墓活動において群としての構成が重視視されるようになったことを示唆するものであり、この段階に群構成の原理が大きく変化したことが予想される。同様の傾向は塚本山古墳群の検討でも指摘されており（余語他1999）、古墳造営主体の性格に関わる問題として重要である。

【VII期】 VI期と同じく両袖型の胴張り石室を主体部としているが、石室構造の規模が縮小し、形骸化が進む。長沖11号墳は台形状の前庭部を付設しており、前庭部から土師器壺、須恵器台付長頸壺が出土し、7世紀末葉まで下降する年代が考えられる。

## （5）まとめ

長沖古墳群は、小山川中流域の台地部と河岸段丘を中心に分布する総数180基を越す大規模群集墳で、現在、十兵衛塚古墳をはじめとする7基の前方後円墳の所在が確認されている。周辺には、対岸に秋山古墳群、広木大町古墳群などの大規模群集墳が分布しているほか、下流の水田地帯に残る丘陵部に生野山古墳群、塚本山古墳群などの大規模な群集墳が所在している。

前述したように古墳群の形成過程は、長沖157号墳にみられるように5世紀中葉段階には築造が開始され、6世紀前葉段階に礫柳状の小豎穴式石室に替わって袖無型短冊形袖型横穴式石室が導入される。さらに埴輪消滅期に相当する6世紀末葉段階には長沖21号墳のように大型の模様積石室が有力墳に遅く採用されている。そして、7世紀代には小型化した模様積石室が小支群を形成しながら築造され、須恵器の様相から7世紀後半の新しい段階まで小規模古墳の造営が継続していたことが明らかにされている。

今回調査を実施した道上1号墳の調査成果としては、今まで分布の希薄であった長沖支群の河岸段丘面西側地区における埴輪を樹立した横穴式石室墳の具体的な様相を明らかにすることが挙げられる。しかし、遺存状況が良好でなかったため古墳の築造時期をはじめ、横穴式石室の構造的特徴については不明な点が多く、大きな課題を残した。また、村後3号墳は出土遺物がなく築造時期については不明であるが、不整形な周溝形態から新しい様相が看取された。

このように長沖古墳群は、武藏北部における群集墳の成立背景、展開・消滅過程等の問題を検討する上で重要な位置を占めており、今後は周辺における群集墳との比較検討により、その歴史的性格を究明していくことが大きな課題として残されている。

## 註

- (1) 現在、児玉町教育委員会では長沖古墳群における新規発見の古墳跡の取り扱いについて、所在する地区ごとに仮番号を付し、〈長沖古墳群+地区名+地区古墳番号〉によって古墳名を呼称している。今回、当事業団が調査した2基の古墳跡の名称についてもそれに従っている。これは墳丘の残存する古墳や既調査古墳と区別する意味で暫定的に用いた古墳名称であり、将来的に古墳番号が整理された段階で「長沖○号墳」に統一することを目的としている。なお、調査時における古墳名称は道上1号墳がA区1号墳、村後3号墳がC区1号墳である。

- (2) 児玉町教育委員会 鈴木徳雄氏に御教示いただいた。